



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	東アジア漢文訓読資料としての敦煌加點本の意義
Author(s)	小助川, 貞次
Citation	国語国文研究, 131, 80(1)-69(12)
Issue Date	2007-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93484
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_131-80-69.pdf



東アジア漢文訓読資料としての 敦煌加点本の意義

小助川 貞次

1. はじめに

漢文訓読は日本語だけの現象ではなく、東アジア漢字文化圏に共通する現象であることが具体的な加点資料の存在によって理解できる。現在のところ漢文のフルテキストに直接加点した資料としては、日本語、中国語、朝鮮語によるものが存在する^(註1)。漢文訓読の射程をこのように東アジア漢字文化圏にまで広げることは、以下に掲げるような訓読に関わる本質的な問題を解明する上で極めて重要な観点となる。

- 1 訓読がテキストを離れた翻訳ではなく、テキストへの加点を採用したのはなぜなのか
- 2 ヲコト点や仮名点などを含めた符号（訓点）の起源はどこにあるのか
- 3 日本の訓点資料の展開は、仏書、漢籍、国書の間でどのように関係するのか
- 4 漢文資料の受容と訓読は当時の学問史、文化交流史、古典学とどう関わるのか
- 5 訓点資料は具体的にどのようなプロセスによって出来上がるのか^(註2)

敦煌加点本の存在はこれらいずれの問題とも関わるが、とりわけ第2項と第3項については、石塚晴通教授が1960年代後半に「声点の起源」の観点から敦煌加点本を取り上げて先鞭をつけた^(註3)。しかし、敦煌文献が海外資料であるための調査の難しさと、日本語訓点資料が当時すでに豊富に存在し、その研究が進展していたこともあって、その後、敦煌加点本に注目する研究者は現れなかった。近年、小林芳規博士の角筆研究の進展と韓国点吐口訣資料の発見（ヲコト点の発見）が、改めて日本語以外の訓点資料に目を向ける大きな契機となった。あわせてコンピュータ技術の急速な進展に伴って、IDP（International Dunhuang Project）データベースが本格的に運用されるようになり、敦煌文献が極めて身近なものになった。現在は、敦煌加点本の加点内容を精密かつ網羅的に観察し、日本語訓点資料および朝鮮語訓点資料と詳細に比較できる環境が整っている。

このような研究状況を踏まえて、本稿は、大英図書館に所蔵される敦煌本漢籍の内、S.10 毛詩鄭箋、S.85 春秋左伝杜注、S.134 毛詩鄭箋、S.799 古文尚書、S.2053 漢書蕭望之伝、S.3663 文選巻第九を取り上げ^(註4)、その加点内容を詳細に観察しながら、

東アジア漢文訓読資料としての敦煌加点本の意義を明らかにするものである。

2. 加点概要

これらの資料には、加点の種類として、科段、句読、破音、書込注、本文校合のすべて、またはそのいずれかが見られる。また、S.10 毛詩鄭箋、S.134 毛詩鄭箋、S.799 古文尚書、S.2053 漢書蕭望之伝では、加点の範囲は本行のみならず割注にも及び、テキストが包括的に学習されていたことが分かる。一方、S.85 春秋左伝杜注では割行には朱点はなく、墨点による加点が数例見られるのみである。なお、S.3663 文選巻第九は元来は無注本であり、本文に挟注として入っている音義は本文書写後に書き込まれたものである^(注5)。以下、資料毎の基礎データを掲げる。

表1 敦煌加点本書誌・加点状況一覧

番号	典籍名	割注	篇名	書写・加点年代	紙数行数	破音の型	紙背
S.10	毛詩	鄭箋	鄘風燕燕～静女	8C中	4紙 96行	Ⅳ(Ⅱ・Ⅴ)	毛詩音
S.85	左伝	杜預	文公14～17	7C末	10紙212行	I	不明(台紙張付)
S.134	毛詩	鄭箋	豳風七月	7C末～8C初	4紙 58行	Ⅳ	不明(台紙張付)
S.799	尚書	孔伝	泰誓中～武成末	7C末～8C初(8C前期)	5紙104行	Ⅳ(Ⅱ・Ⅴ)	習書3条
S.2053	漢書	古注	蕭望之伝	7C後半(7C末)	16紙287行	I	仏典音義
S.3663	文選	無注	嘯賦	8C前～中頃	3紙 37行	Ⅳ	音義1条

※書写加点年代は石塚晴通教授の諸研究による。

S.10 毛詩鄭箋

□. □	674
□・□	15
破音点	129
┐	12
●	12
塗 抹	2
音義注	143
合 計	987

S.799 尚書

□. □	157
□・□	8
破音点	45
見 消	4
重 書	15
補 入	7
合 計	236

S.85 春秋左伝

□. □	252(朱 244、墨 8)
□・□	41(朱 40、墨 1)
破音点	57
見 消	7
重 書	12
補 入	3
転倒符	1
合 計	373

S.2053 漢書

□. □	428
□・□	2
破音点	162
合 計	592

S.134 毛詩鄭箋

□. □	170
□・□	44
破音点	24
見 消	6
重 書	13
補 入	15
┐	2
合 計	274

S.3663 文選

□. □	110
破音点	21
転倒符	1
重書補訂	5
音義注	43
合 計	180

3. 共通する特徴

これらの資料を詳細に見てゆくと、本文の内容はもとより、書写加點年代の違いや破音点の型の違いなど、資料間での違いは多い。しかし、そのような違いにも関わらず、資料間で共通する特徴を挙げることができる。

- 1 □、□（句点）に対して□・□（読点）の数が極端に少ない
- 2 破音点が加點されている漢字は平易なものが多い
- 3 破音点を加點する際に利用したはずの注釈書がなかなか見出せない

以下、それぞれの特徴について考えてみる。

（1） □、□（句点）に対して□・□（読点）の数が極端に少ない

□、□（句点）はすべての資料で全巻（S.85では本行のみ）に満遍なく加點されているのに対して、□・□（読点）は数が少なく、特定の用法に限定される。

S.10 毛詩鄭箋では、□・□（読点）15例は二つの場合に限定される。一つは、各篇冒頭の序小において、篇名を表す語句の後ろに加點されるケースである（10例）。もう一つは、經文 AB に対する毛伝鄭箋の注解が、本来「AC 也 BD 也」とあるべきところを「ACBD 也」と書写したために、「AC・BD 也」と加點されるケースである（5例）。（以下、用例の表示にあたっては、割行を《 》に入れ、改行箇所には／を入れる。破音加點字は□のように表示する）

○篇名直後の読点例

終風四章々四句 擊鼓・怨州吁也。(015)

凱風四章々四句 雄雉・刺衛宣公也。(029)

○毛伝鄭箋の「AC・BD 也」例

有懷于衛・靡日不思《箋云懷至・靡無也。……》(074)

莫赤匪狐・莫黑匪烏《狐赤・烏黑。……》(089)

S.85 春秋左伝杜注では、加點が本行（經文・伝文）のみに見られる点で他の資料とは性格が異なるが^(註6)、□・□（朱読点）40例は「曰」の直後に加點されるケース（21例）と事象・人名の並列に加點されるケース（8例）に集中する点で、他の資料における用法の偏りと共通する。なお、「曰」の場合、□・□（読点）に加えて□、□（句点）が加點されるものが12例あり、この資料では句読点が混用されていると考えることもできる。しかし、經文伝文の「曰」の全用例42例の内、36例に句読点有加點されており、特定の漢字に集中している点で単なる混用とは異なる。

○「日」読点例 (032～035)

月明經日月／皆從赴也》齊公子元，不順懿公之爲政也終
不曰公，曰・夫己氏《猶言某／甲也》襄仲使告于王，請
以王寵，求昭姬于齊《昭姬子／叔姬也》曰・殺其子，焉用
其母，請受而罪之，冬單伯如齊，請子叔

○並列例

《各盡其美／義乃終也》救乏・賀善，弔災・祭敬・喪哀・情／雖不同，(069～070)
傳十七年春，晉荀林父・衛孔達・陳公孫寧／鄭石楚・伐宋，(183～184)

S.134 毛詩鄭箋では、□・□（読点）43 例は「箋云」の直後に加點されるケース（13 例。テキスト全体では「箋云」18 例、「鄭氏箋」1 例あり）と、割注の中の「A・B 也」に加點されるケース（29 例）に集中する。

○「箋云」読点例

人簞戸箋云・爲此／四者，以備寒非卒來》嗟我婦子，日爲改 (046)
場圃《春夏爲圃，秋冬爲場，箋云・場圃同／地耳，物生之時和治之，以種養菜 (056)

○「A・B 也」例

衣《火・大火也，流下也九月霜始降婦功成，／可以授冬衣□，箋云・大火者寒暑 (005)
柔桑《倉庚・離黃也，懿匡深匡也，微／行牆下徑也，五畝之宅樹之桑，箋 (018)
云載之言則也，陽・溫也溫而倉庚又鳴，／可蠶之候也，柔桑釋桑者也》(019)

S.799 尚書では、□・□（読点）8 例はすべて本行の国名の並列に集中する。なお同じ並列であっても職名のときは□，□（句点）が加點される。

及庸・蜀／・差・髡・微・盧・彭・濮・人《八國背蠻夷戎狄，屬文王者國名，差
在西／蜀叟，髡微在巴蜀，盧彭在西北，庸濮在 (044～055)
紂／也》卸事，司徒，司馬，司空《治事三卿，司徒主民，司馬主／兵，司空主土，
指誓戰者也》亞旅 (043)

S.2053 漢書では、□・□（読点）2 例は本行の人名の並列に使われる。

冢，終元帝世望之八子至大官者，育・咸・由，(237)

S.3663 文選では□・□（読点）は使用されない。これは、文選の文体が定型的な韻文であるために、□，□（句点）で十分であったのであろう。

このように敦煌加点本における□・□（読点）は、日本の訓点資料の用法や現代の読点の機能とは異なり、引用の開始（小序篇名、曰、云）や並列を示すために限定して用いられている。それでは、□、□（句点）に対して□・□（読点）の数が極端に少ないのはどういうことなのか。加点されるべき用例そのものが少ない場合もあるが（S.10の小序篇名）、加点されるべき箇所で加点されない例も見られる（S.85 春秋左伝における「曰」や、S.134 毛詩鄭箋における「箋云」の例）。加点の用法が限定されていることからするならば、□、□（句点）の単なる補いではありえない。東アジアにおける漢文古写本・古刊本における句読点の用法・変遷という観点から、今後検討すべき問題である。

（２） 破音点が加点されている漢字は平易なものが多い

「破音」とは、石塚晴通（1970）によれば「其の字の用法が元義・本来の音とは異なるもの（中略）であることを示すために、朱筆にてその字の中央又は右横に点発を加点」（4頁）する方法である。敦煌漢文資料では七世紀中期から見られ、加点形態の転回を経て声点（四声点）へと繋がって行くとされる。中国語学においても「破音」という概念は見られ、戸川芳郎（1970）では「字義の分化に伴い、字音の一部ことに声調を区別して、その派生義を弁別する現象」（152頁）とされる。派生義を弁別する方法であるという点では両者の説明は同じであるが、実際の敦煌加点本では声調の区別を伴わない派生義の加点例もあり、石塚晴通（1970）の方が現状をよく捉えている。

以下に、それぞれの資料における破音加点字を示す。

S.10 毛詩（Ⅳ型）^{（注7）}

- [平] 尉、來、行、畿、与、卑、過、還、歎、更、催、耶、且
- [上] 長、烝、女、牡、已、殷
- [去] 將、難、尉、樂、興、展、思、行、從、燕、見、易、爲、遣、中、好、稱、遠、殷
- [入] 畜、日、契、尉、慰、樂、數、舍、害、適

S.85 春秋左伝（Ⅰ型）

乘、長、還、爲、朝、復、夫、焉、父、共、母、聞、與、罷、卒、員、上、數、施、難、見、幾

S.134 毛詩（Ⅳ型）

- [去] 爲、喜、著、食
- [入] 日、剝、暴

S.799 尚書 (Ⅳ型)^(注8)

- [平] 亡、才
 [上] 長、差、卑、女、巳
 [去] 兩、稱、有、當、將、卸、克、王、陳、責
 [入] 日、比

S.2053 漢書 (Ⅰ型)

相、朝、亡、上、使、少、令、單、數、坐、行、好、復、會、將、治、去、難、塞、樂、弟、爲、繇、見、長、傳、度、分、喪、雨、選、橫、鄉、說、繁、被、嚮、處、殿

S.3663 文選 (Ⅳ型)

- [平] 重、長、號、夫
 [上] 嚮、微、夏、檢
 [去] 引、應、思、累、均、喪
 [入] 屬

これらから重複するものを除き、「異なり」でまとめると以下の107字になる。平易な漢字が多く、ひとつの目安として、日本の常用漢字（昭和56年10月1日内閣告示「常用漢字表」）と対照してみると92字が合致する（92/107=0.86）。小学校6年間で修得する「教育用漢字」と対照しても69字が含まれている（69/107=0.64）。

表2 破音字一覧

上、且、中、乘、亡、令、使、來、催、傳、克、兩、共、分、卑、卒、卸、去、員、喪、單、嚮、均、坐、塞、夏、夫、契、女、好、害、將、尉、少、展、屬、差、巳、巳、幾、度、引、弟、從、復、微、思、慰、應、才、數、施、日、易、更、會、有、朝、樂、橫、檢、歎、殷、殿、母、比、治、烝、焉、燕、爲、父、牡、王、畜、當、畿、相、稱、累、繁、繇、罷、耶、聞、與、興、舍、處、號、行、被、見、說、責、過、遠、適、選、遣、還、鄉、重、長、陳、難、雨（107字）（字書順）		
常用漢字(23字)	教育用漢字（69字）	それ以外(15字)
且、催、克、卑、卸、喪、契、尉、幾、微、慰、施、更、殿、爲、畜、累、繁、罷、與、被、還、陳	上、中、乘、亡、令、使、來、傳、兩、共、分、卒、去、員、單、均、夏、夫、女、好、害、將、少、展、屬、差、度、引、弟、從、復、思、應、才、數、日、易、會、有、朝、樂、橫、檢、比、治、父、王、當、相、稱、聞、興、舍、處、號、行、見、說、責、過、遠、適、選、遣、還、鄉、重、長、難、雨	嚮、坐、塞、巳、巳、歎、殷、母、烝、焉、燕、牡、畿、繇、耶

(3) 破音点を加点する際に利用したはずの注釈書がなかなか見出せない

読書対象が、毛詩、春秋左伝、尚書のような経書の場合には、陸徳明『經典釈文』がいわば標準的な音義書として存在し、日本の経書訓点資料では高い密度で利用されている^(註9)。また、S.10 毛詩鄭箋では紙背に毛詩音が書き込まれ、一方 S.3663 文選では行間に反切注が書き込まれている。破音点がこれらの音義とどのように関係するかという点については、小助川貞次 (2004) (2005) が S.10 毛詩鄭箋、S.134 毛詩鄭箋、S.799 尚書を取り上げて見通しを述べた。これらを踏まえて結論を言えば、『經典釈文』における破読を示した部分とはよく一致するが、日本の経書訓点資料ほどには音義との強い関係が見出せない。ここでは、S.85 春秋左伝、S.3663 文選、S.2053 漢書の場合を掲げる。

表 3.1 S.85 春秋左伝の破音・音義対照表

	加点あり		加点なし		小計	
	経伝	集解	経伝	集解	経伝	集解
經典釈文あり	35	0	80	60	115	60
經典釈文なし	22	0	—		—	
合計	57		140		175	

破音点と『經典釈文』との共起率 $35/57=0.61$

破音点と全音義との対応率 $35/115=0.30$

表 3.2 S.3663 文選の破音・音義対照表

	加点あり	加点なし	小計
音義あり	4	39	44
音義なし	17	—	—
合計	21	39	44

破音点と音義との共起率 $4/21=0.19$

破音点と全音義との対応率 $4/44=0.09$

表 3.3 S.2053 漢書の破音・音義対照表

	加点あり	加点なし	小計
音義あり	2	0	2
音義なし	160	—	—
合計	162	0	2

破音点と音義との共起率 $2/162=0.01$

破音点と全音義との対応率 $2/2=1.00$

表 3.4 S.2053 漢書の破音・音義対照表

※音義に顔師古注を含めた場合

	加點あり	加點なし	小計
音義あり	13	61	74
音義なし	149	—	—
合計	162	61	74

破音点と音義との共起率 $13/162=0.08$

破音点と全音義との対応率 $13/74=0.18$

S.3663 文選、S.2053 漢書では、破音加點箇所における音義との関係はかなり低い (0.19、0.01)。S.2053 漢書の割注には師古注が含まれていないので、仮に師古注に見える音義を含めたとしても、その比率は依然として低い (0.08)。さらに、S.2053 漢書では以下のように割注自身にも破音点に加點されている (割注への破音加點の全例)。

如淳曰雖有五時服至朝皆着阜衣 (048 割 ⇒ 師古注なし)

丞相廷尉板詔令也金布其篇目 (056 割 ⇒ 師古注は本条を引用せず)

蘇林曰弟順也 (090 割 ⇒ 師古注「弟音悌」は本行に対する音注)

應劭曰…則不處漢朝將尋延陵之隱耕臯之中耳 (175 割 ⇒ 師古注は本条に注解せず)

張晏曰朋會稽人。會稽并屬吳後屬楚。 (183 割 ⇒ 師古注なし)

割注における加點の根拠を他の注釈書に求めるのであれば、經書における正義のように、本文と割注全体を再注釈するような注釈書を想定しなければならない。顔師古注は、先行注を引用することはあっても、先行注の字句に直接注解を施すことは希である。一方、隋姚察『漢書訓纂』、唐顧胤『漢書古今集義』は逸書であるが、上野本漢書楊雄伝に引用されている兩書の逸文を見ると、如淳、蘇林、應劭、張晏などを引用することがあり、このような顔師古注以外の漢書集注が利用された可能性も否定できないが、やはり推測の域を出ない。

これに対して、S.85 春秋左伝の場合には、破音加點箇所における『經典釈文』との関係はかなり高い (0.60)。特に『經典釈文』に「下…同」と記載される場合、その関係は顕著である。

○ 經典釈文：[爲請求] 如字一音于偽反下以爲請同十五年亦放此 (卷第 16/18 a)

023：以爲請，襄仲使無朝聽命，復而不出《不得使与／聽政事終

024：寢於家故／出入不書》三年而盡室以復適莒，文伯疾而請

025：曰穀之子弱《子孟獻子／年尚少也》請立難也《難穀／弟也》許之・文

026：伯卒立惠叔，穆伯請重賂以求復，惠叔以爲

027：請許之將來・九月卒于齊・告喪・請葬弗許

○ 經典釈文：〔聞於國〕音問或如字下同（卷第 16/18 b）

072：來《敖在莒／所生也》孟獻子愛之聞於國《獻子穀之子／仲孫蔑也》

073：或譜之曰、將殺之。獻子以告季文子、二子

074：曰・夫子以愛我聞、我以將殺子聞、不亦遠

しかし、『經典釈文』の経伝に対する被注字全体（115 字）から見ると、実際に破音が加点されているのは 35 字に過ぎず、残りの 80 字には加点がない。日本の経書訓点資料で『經典釈文』に対応しながら声点等が加点されているのとは、やはり事情が異なる^(註10)。さらに、敦煌加點本の中でも、仏典における破音加点を考えてみるならば、加点の背景に具体的な注釈書を想定することは一層難しい^(註11)。

4. 加點の背景

本稿で取り上げた資料で、複数の資料間に共通して現れる破音加點字は 37 字ある。

上、亡、克、兩、卑、卸、喪、嚮、夫、女、好、將、差、已、復、思、才、數、日、有、朝、樂、殿、比、爲、王、當、稱、與、處、行、見、責、還、長、陳、難

これらの中には、確かに『經典釈文』に記載されるものもあるが、『經典釈文』だけですべての破音字を説明できないことはすでに述べた。破音加點の背景には、特定のテキストに密着した音義書があったと考えるよりも、複数の資料に共通する破音加點の基盤があったと考えるべきであろう。敦煌加點本の調査範囲を広げて行けば、恐らく特定の典籍に依存しない破音字の「常用文字セット」が抽出できると考える。敦煌加點本の破音字に『經典釈文』と合致するものが見られるのは、むしろ『經典釈文』がそのような「常用文字セット」を集大成して行ったからであろう。

このような破音字の「常用文字セット」は、例えば張守節「史記正義發字例」に掲げられた以下の 39 字も、その一種であると見なすことができる^(註12)。

畜、從、數、傳、率、辟、施、間、射、夏、復、重、適、汜、樂、覆、恐、惡、斷、解、幾、過、卒、屈、上、王、長、藉、培、勝、難、使、相、沈、任、棺、造、妻、費

日本の経書訓点資料では、陸德明『經典釈文』が積極的に利用されている^(註13)。しかしその割には破音の加點が少ない。一方、敦煌加點本では、『經典釈文』の利用を積極的に認めることのできる例は少ないが、破音の加點は比較的豊富にある。この違いには、破音字の「常用文字セット」とともに『經典釈文』の普及の問題がありそうである。敦煌本には『經典釈文』の残巻が少ないという点は注意すべきであろう。また、日本の漢籍訓点資料で破音が意外に少ないのは、日本の訓読における「和訓」「ヲコト

点」の加点が、すでに破音（破読）の機能を果たしていたからであろう。その一方で、日本の経書以外の漢籍訓点資料や博士家所管の国書訓点資料でも破音の加点は見られる。『經典釈文』の情報を援用したのか、それとも破音字の「常用文字セット」が日本にもあったのか。敦煌加点本における破音字の収集とともに、日本の訓点資料における破音字の収集も重要な課題である。

5. 結 論

以上述べたことをまとめると以下ようになる。

- 東アジア漢文訓読資料として敦煌加点本を調査できる環境が整ってきたこと
- 敦煌加点本には本文内容や書写加点年代を超えて共通の加点内容が見られること
- □・□（読点）は現代の読点とは異なり、特定の用途に使われていること
- 破音点が加点されている漢字は平易なものが多いこと
- 破音点の背景には特定の注釈書ではなく、破音字の「常用文字セット」が想定できること
- 敦煌加点本は日本の訓点資料における破音を考える上で重要な資料であること

敦煌加点本は漢文訓読資料として重要であることは言うまでもないが、「破読」の現象が具体的に現れた資料として捉えるならば、中国語史とりわけ「四声別義」の好資料となる。中国語学からのアプローチがあることが期待される。

〈注〉

- 1 ウイグル語、ベトナム語による漢文訓読については庄垣内正弘(2001)、石塚晴通(1993)(2001)参照。
- 2 小助川貞次(2006)参照。
- 3 石塚晴通(1967)(1969)(1970)参照。
- 4 本稿で取り上げる敦煌加点本は、2004年9月、2006年3月、同9月に大英図書館で調査したものである。なお、S.10(毛詩鄭箋)、S.799(古文尚書)、S.3663(文選卷第九)についてはIDP(International Dunhuang Project)で精密画像が確認できる。
- 5 王重民(1958)は「又按幅内行間、多注反切、審其筆跡、稍與正文不同、蓋は後人所加。」(322頁)とする。
- 6 若干の墨点が割注にも加点されるが、加点数そのものが少ない。
- 7 「尉」(25行目)に右上(Ⅳ型では去)の加点と左下(Ⅳ型では平、Ⅱ型では去)加点がある。「慰」(29行目)及び「尉」(29行目割行)に右下(Ⅳ型では入、Ⅴ

型では去) 加点がある。「燕」(47 行目) は紙背書込音注「燕顯反」があり、上声であることを示すが、実際の加点は右上(Ⅳ型では去声、Ⅴ型では上声)にある。同一篇内の「燕」(48 行目)、「燕」(54 行目) も同じ。「殷」(81 行目、元来「慇」か) は紙背書込音注に「隱」「殷」があり、それぞれ上声(去声)、平声であることを示すが、実際の加点は左上(Ⅳ型では上、Ⅴ型では平)と右上(Ⅳ型では去、Ⅴ型では上)にある。いずれもⅣ型(左下平)の加点として、それぞれの加点意図を考えるか、それともⅡ型、Ⅴ型が混在する資料と見なすか、この資料の加点年代や加点の層とも関わる問題である。

- 8 「才」(66 行目、字体は「寸」のごとし) は左下に加点があり、『經典釈文』(徐音載=去声) に拠ったとすれば左下去声でⅡ型になるが、字体の問題で「寸」ではなく「才」であることを示していると考えれば平声でⅣ型になる。「差」(45 行目) は左上に加点があり、『經典釈文』(徐起良反=平) に拠ったとすれば左上平声でⅤ型になる。「比」(46 行目) は右下に加点があり、『經典釈文』(徐扶志毘志二反=去) に拠ったとすれば右下去声でⅤ型。
- 9 原卓志(1987 a)(1987 b) 参照。
- 10 注 9 文献。また『上野本漢書楊雄伝天曆二年点』の場合については、小助川貞次(1990) 参照。
- 11 仏典の場合、玄応音義や慧琳音義がどのように利用されたかについては分からない。日本の仏書訓点資料における音義の利用については、小助川貞次(1996)(1997) で若干の見通しを述べた。
- 12 宋代以降の問題については森賀一恵(2000) に詳しい。
- 13 注 9 文献参照。

〈参考文献〉

- 石塚晴通(1967):「中国中古の加点本につきて」(第 17 回訓点語学会)
- 石塚晴通(1969):「声点の起源につきて」(国語学会→要旨『国語学』78 輯)→石塚晴通(1995)
- 石塚晴通(1970):「楼蘭・敦煌の加点本」(『墨美』第 201 号)→石塚晴通(1992)
- 石塚晴通(1992):「敦煌の加点本」(講座・敦煌第 5 巻『敦煌漢文文献』、大東出版社)
- 石塚晴通(1993):「中国周辺諸民族に於ける漢文の訓読」(『訓点語と訓点資料』第 90 輯)
- ISHIZUKA Harumichi(1993):“The Origins of the Ssū-shêng Marks”, ACTA ASIATICA, 65, The Toho Gakkai
- 石塚晴通(1995):「声点の起源」(『日本漢字音論輯』所収、汲古書院)
- 石塚晴通(2001):『訓点語辞典』(「総説」、東京堂出版)
- 王重民(1958):『敦煌古籍叙録』
- 小助川貞次(1990):「上野本漢書楊雄伝の声点について」(『国語国文研究』第 86 号)

- 小助川貞次 (1996) : 「高山寺藏大乘理趣六波羅蜜多經仁安元年点翻字文」 (『平成七年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査団)
- 小助川貞次 (1997) : 「高山寺藏大乘理趣六波羅蜜多經卷第七仁安元年点翻字文」 (『平成八年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査団)
- 小助川貞次 (2004) : 「敦煌本毛詩鄭箋 (S.10) の加点方法について」 (第 90 回訓点語学会)
- 小助川貞次 (2005) : 「敦煌漢文文献における破音加点の背景」 (第 92 回訓点語学会)
- 小助川貞次 (2006) : 「訓点資料が出来上がるプロセスについて」 (『訓点語と訓点資料』第 117 輯)
- 庄垣内正弘 (2001) : 「ウイグル語における漢文訓読」 (国際ワークショップ「漢文古版本とその受容 (訓読)」、北海道大学)
- 戸川芳郎 (1970) : 『中国語学新辞典』 (152 頁 - 153 頁「破音」、光生館)
- 原卓志 (1987 a) : 「古文尚書平安中期点における朱声点・点発について」 (『広島大学文学部紀要』第 46 巻)
- 原卓志 (1987 b) : 「毛詩唐風平安中期点における經典積文の利用 —— 声点・点発を通して ——」 (『国文学攷』第 114 号)
- 森賀一恵 (2000) : 「四声別義と『羣經音弁』」 (『興善教授退官記念中国文学論集』、汲古書院)

付記

本稿は、国際ワークショップ「典籍交流 (訓読) と漢字情報」 (2006 年 8 月 22 日、北海道大学) における発表原稿「東アジア漢文訓読資料としての敦煌加点本の意義」を補訂したものであり、科学研究費・基盤研究 B(2)「国際的視点から見た日本語・朝鮮語における漢文訓読に関する実証的研究」による研究成果の一部でもある。

(こすけがわ ていじ・富山大学教授)